様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３４０１２１

研究課題名（和文）我国の世界遺産地域を中心としたコモンプールアプローチに基づくエコツーリズムの分析

研究課題名（英文）Analysis of ecotourism based on common pool approach centered on the world natural heritage area in Japan

研究代表者
藪田　雅弘（YABUTA, MASAHIRO）

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：４０１４８８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、昨今の世界遺産ブームにあって、特にわが国の世界自然遺産地域を対象に、持続可能な観光発展が進展しているか否かを評価する事にある。
本研究では、①世界遺産制度のガバナンスについて検討し、②コモンプールの観点から、持続可能な地域観光資源の利用と管理運営のあり方を検討した。さらに、③持続可能な管理運営の仕組みを「エコツーリズム」として把握し、④エコツーリズムの原則に基づいて、わが国の世界自然遺産地域が持続可能な観光発展の状況にあるか否かを具体的に検討した。本研究を通じて、持続可能な地域観光資源の利用にとって必要な幾つかの地域観光政策の在り方が検証され提言可能となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to evaluate whether or not sustainable tourism development is realized, especially in the world natural heritage area of our country, in recent world heritage boom.
In this study, we examined the governance of the World Heritage System and examined the way of using and managing sustainable regional tourism resources, from the perspective of the common pool approach.Besides, we grasp the mechanism of sustainable management of tourism resources as " ecotourism." Then, based on the principle of ecotourism, we analyzed as to whether or not the world natural world heritage area of the country is in a state of sustainable tourism development. Through this research, several regional tourism policies are verified to make regional tourism resources sustainable.

研究分野：環境学

キーワード：持続可能な観光　エコツーリズム　世界遺産制度　コモンプールアプローチ　環境保全

１．研究開始当初の背景

(1)観光の現状：地域開発が過度に観光発展に依存し、多くの観光地でマスツーリズムの弊害が生じている。地域が発展するために観光資源の開発を行い、地域の発展につなげる地域戦略が企図されている。その最たるケースが、世界遺産への登録を通じた観光資源のブランド開発であり、わが国でも積極的に世界遺産登録に向けた活動が行われてきた。しかし、地域観光資源としての世界遺産登録後のマスツーリズムの展開によって遺産の価値が損なわれ、観光発展そのものが問題視される事態が生じている。地域観光資源の適切な保全、利用による持続可能な観光発展のためには、どのような工夫が必要なのであろうか。

(2)理論的分析の必要性：地域観光資源の過剰な利用傾向とその適切な管理運営システムの構築に関して、これまで、整合的な経済理論による説明が行われてこなかった。何故、地域観光資源の過剰な利用が進むのかについて、Ostrom(2015)のコモンプールアプローチを援用し、政府の関与や市場による解決の他に、地域住民による主体的な管理、運営の在り方について考える必要がある。とくに地域観光資源に着目した持続可能な地域発展を「エコツーリズム」として把握し、その原則に基づいて、わが国の世界遺産地域が持続可能な発展の状況にあるか否かを評価し、加えて、地域観光資源保全のためのガバナンスを検討することが求められている。

２．研究の目的

本研究の目的は、わが国の世界遺産地域（世界遺産を含む基礎自治体の範囲）を対象に、持続可能な観光発展が行われているか否かを実証し評価する事である。まず、①自然や文化などの地域観光資源をコモンプール資源（皆のものであるが（非排除性）、誰かの利用が他者の利用を困難にする（競合性）財、資源）として把握し、この視点から地域の適切な管理運営のあり方を探り、②とくに地域観光資源に着目した持続可能な管理運営を「エコツーリズム」として把握する。その原則に基づいて、③わが国の世界遺産地域が持続可能な発展の状況にあるか否かを、関連する基礎自治体への実証研究を通じて明らかにする。加えて、④地域観光資源保全のためのガバナンスに関して、具体的な地域政策の評価と検証をして政策提言を行う。

３．研究の方法

(1)地域観光資源の持続可能な管理運営に関する経済理論的分析を行う。コモンプールアプローチによる地域観光資源の利用と保全に関する理論的分析を行う。まず、地域の観光資源をコモンプールとして把握し、過剰利用が生じる蓋然性が高いことを説明する。次に、世界遺産制度のガバナンスを検討した上で、コモンプール資源（誰でも利用できるが、誰かの利用が他者の利用を妨げる資源あるいは財）としての地域観光資源に関する管理、運営の在り方を検討する。

(2)我が国の世界自然遺産地域を対象に、エコツーリズムの原則に基づいた評価を行い、現下の問題点を検討する。そのために、①自治体へのアンケート調査、②Web 調査に基づく分析を行ない、地域観光資源としての世界自然遺産が持続可能な状態で管理されているか否かを検討する。

４．研究成果

(1) 本研究では、疲弊し衰退傾向にある地域において、地域発展を推進するための観光発展が、持続可能性を保証しながら実現されるためには、どのようなアプローチが必要であるのかという視点に立って分析を行った。特に、地域観光資源の利用とその成果、地域観光資源の持続可能な利用に関する分析枠組みとして、コモンプール資源としての地域観光資源の利用と保全管理の観点から、コモンプールアプローチをベースに研究を行った。我が国の世界自然遺産地域を分析対象として分析を行った。この持続可能な観光資源の活用の形態は、エコツーリズムと呼ばれる([雑誌論文]④)が、本研究で得られた知見は、次の四つの点に関連している。すなわち、

(i)エコツーリズムなど持続可能な観光と発展に関する形態と定性的な分析、

(ii)コモンプールアプローチを基礎とする地域発展の理論的分析、

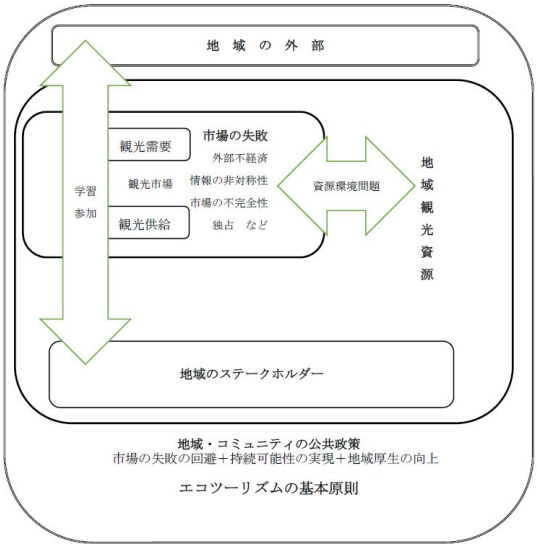
(iii)地域の環境保全と観光発展に関するガバナンスの分析、

(iv)その実証としての我が国の世界自然遺産地域における地域観光資源の管理、運営の現状分析、

である。

(2) まず、上記(i)のエコツーリズムなど持続可能な観光と発展に関する形態と定性的な分析、地域の観光発展と持続可能性に関連する先行研究は、必ずしも多くはない。本研究の視点は、環境などの持続可能性を維持する仕組みと、観光発展との関連を検討するための、分析枠組みを与えることを企図とした。これに関して行った研究は、主に[雑誌論文]⑤で纏めた。エコツーリズムに関して、観光に関する様々な行動が地域観光資源の保全をベースに実行される狭義のエコツーリズムと、観光発展の結果が、市場の失敗（図参照）を回避し、持続可能な地域観光資源の利用に繋がるとする広義のエコツーリズム、という二つの概念によって定義し、そこから地域における観光発展の在り方を考えるという独自的なアプローチを考えた。これに関して、[雑誌論文]⑥、では、市場の失敗という観点から観光分析の枠組みを考える分析方法を考え、また、[雑誌論文]②では、世界遺産に繋げて分析を行った。

図１　市場の失敗と観光分析の枠組み（[雑誌論文]⑤）



(3) 次に、上記(ii)：コモンプールアプローチを基礎とする地域発展の理論的分析を[雑誌論文]④で行った。コモンプールは、非競合的、非排除的な性質をもつ資源であり、通常は、過剰な利用が進むことが知られている。地域観光資源をコモンプール資源として捉えた場合、過剰な利用が行われる傾向をもつ。そのため、地域観光資源については、地域の人々による適切な管理システムが必要であり、これ関連した分析を行なった。いわば、観光分析に関する理論的分析を、コモンプールアプローチの視点から行った。この問題に関しては、[学会発表]①および[学会発表]②の報告論文で分析を行った。とくに、新しい知見としては、地域観光資源の利用については、確かに過剰な利用傾向による問題もある一方で、里山問題のように、需要の低迷による過少利用の結果として地域観光資源の持続可能性が失われる可能性があることを、里山里海モデルとして分析した。

(4) 以上の理論分析をベースに、上記(iii)：地域の環境保全と観光発展に関するガバナンスの分析を行った。これに関しては、[雑誌論文]②および⑤において、世界遺産を中心に、世界遺産制度による地域観光資源の保全の在り方を検討した。観光開発や地域開発が、世界自然遺産の保全を困難にする原因となっている点を示し、エコツーリズムの基本原則の観点から地域観光資源を保全することが重要であることを示した。表１は、エコツーリズムの原則から見た世界自然遺産の代表的な事例であるガラパゴスの観光管理の在り方を示している。これを日本に当てはめた場合、観光発展がもたらす様々な弊害については大きく懸念されている所であり、世界遺産登録後の急激な観光客の流入による混雑現象の問題や自然環境への影響が問題視されている。また、地域発展に向けた観光開発が、恒常的な自然環境への脅威となっている屋久島、知床や小笠原諸島などの問題がある。言うまでもなく、わが国の場合, 1980年代後半のリゾート開発の失敗などがあり、地域住民の厚生を最大化させる努力よりも、地域観光資源の過剰利用が進み、持続可能な地域発展が阻害された。その反省もあって、2008 年にエコツーリズム推進法が施行され、自然環境への配慮、観光振興および地域振興への寄与、環境教育への活用などを基本理念として、政府によるエコツーリズムの基本方針策定のもとで、市町村ベースでのエコツーリズム推進母体と構想の策定、必要に応じた環境保全などができる仕組みが形成された。観光発展は、それ自身常に、地域の自然や文化、時として社会自身に悪影響をおよぼす危険性を持っていることを念頭に、表１にあるようなエコツーリズムの原則をベースにした観光発展計画の策定が求められている。

表１　エコツーリズムの原則と観光管理（[雑誌論文]⑤）

エコツーリズムの基本原則	持続可能な資源利用	過剰消費や浪費の抑制	環境的多様性、文化資源の維持	地域計画策定、地域経済の維持	地域共同体との連携、組織間の協働	関係者の教育	適切なマーケティング	モニタリングと研究調査
ガラパゴスの観光管理	漁業管理/移住規制／観光客数規制／観光容量管理／アクセスポイント規制など	地域計画（土地利用、エネルギー利用、廃棄物規制）	検疫制度の拡充／時間規制／観光客来訪エリア規制／国立公園管理	地域住民の環境容量設定戦略／地域の観光開発計画設定	保全当局間の資源配分／効果的な保全当局管理	包括的な教育改革／環境教育プロジェクト	環境影響の厳しさの理解／地域住民の観光への参加	モニタリングシステムと技術の向上／生態環境に対するモニタリングデータベースの構築

(iv)最後に、世界自然遺産の保全と地域観光資源の活用に関する実証分析として、我が国の世界自然遺産地域における地域観光資源の管理、運営の現状分析を行った（[雑誌論文]①を参照)。Web 調査にもとづいて得られた知見は、①世界遺産としての認知は、知床、屋久島は概ね 70%であったが、白神山地、小笠原諸島の認知度は 50%程度と相対的に低く、実際の訪問経験に関しても同様の傾向がある。②世界遺産の訪問については、自然や文化への愛好傾向の他に、良好な保全状況の他、「有名であるから」との回答が多い傾向がある。③世界遺産に期待することとして、「ごみなどが落ちていない」（48.8%）ことの他に、「訪問者の理解が十分ある」「解説がしっかりしている」など、世界遺産制度の在り方に関して教育的側面を重視する回答がある。加えて、④世界遺産を保全する場合に最も重要と考えるステークホルダーはだれかという設問については、行政（国)、行政(自治体)地域住民、観光客、旅行業者の順となっており、⑤世界遺産の保全にとって重要と考えられる手段として、「観光客の流入規制」「モニタリングの整備」「自治体間の協力」が挙げられている。他方、自治体へのヒアリング、アンケート調査にもとづいて得られた主な知見としては、①観光容量のとらえ方は自治体毎に異なっているが、自然環境の状態、交通量、宿泊施設の順で重要と考えている、②世界自然遺産の保全管理について重要と考えるステークホルダーについては、国、都道県の他に、「住民と自治体の連携が重要」と考えていること、加えて③世界遺産登録前後の影響、変化に関しては、自治体間の差は大きいものの、概ね社会・経済面では、雇用、

宿泊施設、交通手段面での評価が高く、なかでも「住民団体の活動」にプラスの影響があった。他方、環境面に関しては、「固有種の保全対策」「外来種の駆除対策」「森林保全」など、自然遺産ならではの課題が挙げられている。先の、エコツーリズムの原則に照らして考えた場合、地域観光資源の保全管理に関して、ステークホルダーの責任ある行動への要請や、自治体と住民の一体となった自然保護活動の実施が重要であることが理解できる。あらためて表１に示した、エコツーリズムの原則に基づいた地域の観光計画が重要であることが指摘できる。

＜引用文献＞

Ostrom Elinor,2015, *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 薮田雅弘「我が国の世界自然遺産の保全と観光」『中央大学経済学論纂』、査読無、2018、掲載確定
② 薮田雅弘「世界遺産保全と観光発展について」『中央大学経済研究所年報』、査読無、2017、Vol.49、385-403
③ Masahiro Yabuta ”Local certification tests and community development, Japan, ” in Managing Growth and Sustainable Tourism Governance in Asia and the Pacific、UNWTO, 査読有、2017、66-70. ISBN-10: 9284418895
④ Masahiro Yabuta, “ Optimality and Sustainability of Tourism Resource Management: Cooperative management or Regulatory Policy? ”、経済学論纂 56[3.4]、中央大学、2016、査読無、465-476
⑤ 薮田雅弘、「エコツーリズムと環境保全」亀山康子、森晶寿編著『環境政策の新地平第１巻、グローバル社会は持続可能か』第 6 章所収、査読有、2015、岩波書店、119-140、ISBN-10: 4000287915
⑥ 薮田雅弘「観光市場の失敗と公共政策」、経済学論纂 55[3,４]、中央大学、2015、査読無、29-47.

〔学会発表〕（計 5 件）

① 薮田雅弘、Ecotourism Development and Satoyama: from the Common Pool perspectives、International meeting on Ecotourism and Regional Development in Asia, Chuo University、2018
② 薮田雅弘、観光経済学の潮流と展開について：持続可能な観光をめぐって、日本応用経済学会 2017 年度秋季大会（東海大学）、2017
③ 森朋也、薮田雅弘、日本のインバウンド観光需要に関するパネル分析、日本応用経済学会 2016 年度秋季大会（慶応義塾大学）、2016
④ 薮田雅弘、新しい東北亜細亜農村観光の傾向 ：日本のエコツーリズムの展開と課題、東北亜観光学会国際連合会議、2015
⑤ 薮田雅弘、中平千彦、小澤卓、An empirical investigation of tourism demand and seasonality in Japanese remote Islands: Panel data analysis、日本経済政策学会国際会議、2015

〔図書〕（計 2 件）

① 中平千彦,薮田雅弘編著『観光経済学の基礎講義』九州大学出版会、2017、第１章、5 章、6 章,8 章,10 章執筆および編集担当、352 頁
② 福重元嗣・細江守紀・焼田党・薮田雅弘編著『ベーシック応用経済学』勁草書房、第5,13,14,15,16 章を編集、16 章執筆、2015、275 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等　特記事項なし

６．研究組織

(1)研究代表者

薮田　雅弘（YABUTA,Masahiro）

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：40148862

(4)研究協力者

①Noel Scott

Griffith University・Griffith Institute for Tourism・Professor

②金　承華（JIN Chenghua）

中央大学・大学院経済学研究科博士課程（2018 年 4 月より関東学園大学・経済学部・専任講師）

③高尾　美鈴（TAKAO,Misuzu）

中央大学・大学院経済学研究科博士課程